

KEK クライオ電子顕微鏡 (Talos Arctica - Falcon III)

外部向け初期トレーニング・テキスト

*本テキストは、以下の先生方のご協力のもと、作成いたしました。心より感謝申し上げます。

青山一弘先生 [FEI/阪大]、千田俊哉先生 [KEK]、川崎政人先生 [KEK]、湯本史明先生 [KEK]、Christoph Gerle 先生 [阪大]、岩崎憲治先生 [阪大]、杉田征彦先生 [阪大]、横山武司先生 [理研]、内窪友美先生 [理研]、Arjen J. Jakobi 先生 [TU Delft]、Radostin Danev 先生 [東大]、包明久先生 [東大]、滝沢由政先生 [東大]、重松秀樹先生 [理研]、広瀬恵子先生 [産総研]、守屋俊夫先生 [KEK]、小祝孝太郎先生 [KEK]、吉川雅英先生 [東大]、柳澤春明先生 [東大]、西澤知宏先生 [東大]、荒牧慎二先生 [TVIPS]、真柳浩太先生 [九大]

*I-III 章は外部ユーザー向け、IV 章は KEK スタッフ向け、になっています。

目次

I. オートグリッドの作製と電顕への導入

1. 器具の冷却など	p.03
2. クライオグリッドの作製	p.05
3. オートグリッドの作製	p.06
4. オートグリッドを Cassette・NanoCab 経由で電顕へ入れる	p.07

II. 自動データ測定

1. Inventory と Column Valve の Open	p.08
2. EPU による自動測定 (Linear mode x 3 通り)	p.09
3. トラブルシューティング	p.13

<u>III. 後片付け</u>	p.16
------------------	------

IV. 自動測定をする前に必要なセットアップ

1. Conditioning (月 1 回)	p.17
2. およそのアラインメント (毎日)	p.17
3. C2 絞りの中心合わせ (適宜)	p.18
4. ピボットポイントの調整 (毎日)	p.19
5. Rotation Center (毎日)	p.19
6. 位相板への焦点合わせ (毎日)	p.20
7. 対物絞りの中心合わせ (毎日)	p.21
8. AutoCTF (毎日)	p.22
9. EPU における dose, fraction の設定 (毎日)	p.23
10. Gain reference (週 1 回)	p.24
11. EPU の倍率間の中心合わせ (毎日)	p.24
12. EPU のリスタート (毎日)	p.24
13. EPU の Preparation の設定 (必要に応じて)	p.25
14. グリッドのアセトン処理 (必要に応じて)	p.27
15. グリッド作製用の液体窒素の補充 (必要に応じて)	p.27
16. 電顕用の 250L 液体窒素タンクの交換 (2 週間に 1 回くらい)	p.27
17. Counting mode での撮影 (高分解能解析用の画像を撮る場合 : Counting mode x 2 通り)	p.28
18. 電顕のシャットダウンと立ち上げ (停電前や故障時)	p.37
19. Talos Arctica のレンズ/絞りの構成	p.40

変更履歴

日本語第 1 版	18.05.11. 安達 成彦	初版
日本語第 2 版	18.05.13. 安達 成彦	軽微な変更
日本語第 3 版	18.05.13. 安達 成彦	FEI のカタログより写真を追加
日本語第 4 版	18.05.22. 安達 成彦	Section IV に追記
日本語第 5 版	18.05.22. 安達 成彦	軽微な変更
日本語第 6 版	18.06.11. 安達 成彦	重要事項を赤字に。位相板なし・Counting mode を追加
日本語第 7 版	18.06.12. 安達 成彦	軽微な変更
日本語第 8 版	18.06.13. 安達 成彦	トラブルシューティングを追加
日本語第 9 版	18.06.14. 安達 成彦	軽微な変更
日本語第 10 版	18.06.15. 安達 成彦	Preparation の表の内容を変更
日本語第 11 版	18.06.16. 安達 成彦	軽微な変更
日本語第 12 版	18.06.25. 安達 成彦	変更履歴を追加
日本語第 13 版	18.07.09. 安達 成彦	ブレーカーが落ちた時の対応を追記。その他、各種変更
日本語第 14 版	18.07.18. 安達 成彦	作成協力の項目を追記
日本語第 15 版	18.07.26. 安達 成彦	軽微な変更
日本語第 16 版	18.08.07. 安達 成彦	電源のシャットダウンと立ち上げを追記
日本語第 17 版	18.08.23. 安達 成彦	Talos Arctica のレンズ構成などを追記
日本語第 18 版	18.10.11. 安達 成彦	EPU による自動測定条件を 5 通りに場合分け
日本語第 19 版	18.10.15. 安達 成彦	AutoCTF, ピボットポイントの項目を変更。
日本語第 20 版	18.11.06. 安達 成彦	AutoCTF の順序を変更。トラブルシューティングを追加
日本語第 21 版	19.03.26. 安達 成彦	EPU, TEM User Interface の version up に伴い改訂
日本語第 22 版	19.03.28. 安達 成彦	Auto Eucentric の手順を改訂
日本語第 23 版	19.04.02. 安達 成彦	AutoCTF の手順を改訂
日本語第 24 版	19.04.11. 安達 成彦	アラインメントの手順について、部分的に変更

英語第 1 版 18.##.##.## ## ##

日本語第 ## 版を英語に翻訳

I. オートグリッドの作製と電顕への導入

全般的な注意点

*Grid に触れる全てのものが、すでに冷えた状態であるように気をつける。器具から出る泡が激しく沸騰した状態から小さい泡が出る状態になるまで待つから使う。

*一度液体窒素で冷やしたものを外に出すと霜がつくが、それを再度液体窒素に入れると、霜がグリッドに付いて良くない。なので、液体窒素の外に出さないか、新しいものを使うこと

1. 器具の冷却など

1L ポット x 4 に液体窒素を注ぐ。注ぎ口をアルミ箔でフタをする。

・ Vitrobot の立ち上げ

- Humidifier をはめる (**正しくはめないとステージとぶつかって故障します**)
- 下からシリンジで MQ 50mL を入れる (最後に少し引く)
- Vitrobot の電源を入れる (スイッチは装置の背面の右手下)
- タッチパネルで 18℃ (or 8℃), 100%, humidifier ON に設定
- Use Footpedal, Humidifier off, Skip grid transfer にチェックを入れる
- 2 回くらい踏んで、白いフタを閉じる
- ろ紙を 1 枚ずつ、左右にセット (手袋着用。切り口の曲がり方が外側を向くように)
- 10 分くらい待つ (ろ紙を入れて 1 時間たったら新しいものに取り替える)

・ Vitrobot 用の発泡スチロール容器の組み立てと冷却

- 組み立てて、500mL ビーカーでフタをする
- 周辺の堀とエタンカップ (金色) に液体窒素を注ぐ (2-3 回繰り返し、10 分以上待つ)
- 気体エタンを液体エタンにする。できるだけ、カップのフチぎりぎりまで作る。

注意：液体エタンは大変危険です。必ず防護メガネ・手袋を着用すること。もし目に入ると失明します。また、直接容器を持つと危ないのでフタに乗せて運びましょう。

- スパイダーを外す (そのままにすると、凍ってスパイダーが取れなくなります)
- エタンカップの内壁が白くなるくらいまで待つ

注意：液体エタンの温度は-89℃から-183℃まで幅があります。よいグリッドを作るには-160℃以下が望ましいと言われていしますので、固化するぎりぎりを使うのが良いそうです。一度固化させてからピンセットのお尻を入れて溶かす方法もあるそうです。

- CryoGrid Box (水色) を入れて、完全に冷えるまで数分待つ

・ Loading station の組み立てと冷却

- 組み立てる（500mL ビーカーで液体窒素の注ぎ口にフタをする）



- AutoGrid alignment tool (鉄)と AutoGrid container (白)を入れる



- 注ぎ口から液体窒素を注ぐ（霜の混入を防ぐため、注ぎ口にキムワイプを詰めておく）
- これを 2-3 回繰り返す
- 液体窒素が減らなくなってから、さらに 10 分以上待つ

（*この容器は液体窒素の減りが早いので、以降、こまめに液体窒素を継ぎ足しましょう）

・ NanoCab の冷却

- NanoCab に液体窒素を注ぐ



- 少し待つと半分くらいに減るので、再び液体窒素を入れる
- これを何回か繰り返す
- 液体窒素が減らなくなってから、さらに 10 分以上待つ

・ PIB-10 の空運転

- 朝一番で、PIB-10 を一度、空運転しておく

2. クライオグリッドの作製

- グリッドはあらかじめアセトンに一晩浸けた後、風乾させておく
- アセトン処理済みのグリッドを必要枚数だけ、先細ピンセットで取り出す
- ガラスプレパラートの上に、グリッドの裏面(ピカピカしたほう)を上にして並べる
- PIB-10 で親水化 (Hard, 1.5min → Start ボタンを押す)
- PIB-10 から取り出して、グリッドをひっくり返して、再度親水化 (Hard, 1.5min)
- Vitrobot の設定 (Blotting time を 15-20 秒に。もしくは 5 秒で blot force=10 など)

□Footpedal を何回か踏んで、ピンセットホルダーを下げる

- Vitrobot 用ピンセットでグリッドをつまんで黒い留め具で固定(振って落ちないか確認)



- ピンセットを Vitrobot にセット (*カーボン面(表面)が利き手側を向くように)
- Footpedal を 3 回踏んで、ピンセットを上を移動させる

- 発泡スチロール容器に十分量の液体窒素を注ぎ、Vitrobot のステージに置く
- Footpedal を 1 回踏んで、発泡スチロール容器を上を移動させる
- Footpedal を 1 回踏んで、ピンセットを下げる
- サンプルを 3uL スポット (*泡を作らない。少しチップに溶液が残ってもあきらめる)
- Footpedal を踏むと、グリッドが Blotting されて液体エタンにじゃぼんと浸かる
- ピンセットと発泡スチロール容器が下がってくる
- 霧が晴れるまで 20 秒くらい待つ (待っている間に液体窒素を注ぎ足す)
- 親指の腹で押すような感じでピンセットを外し、発泡スチロール容器ごと手元に移動
- グリッドはエタンの中に浸したまま、
 - ピンセットの黒い留め具の下を持ち、黒い留め具を上をずらす
- グリッドをエタンから液体窒素へ移動
- グリッドを CryoGrid Box (水)に収納 (どの番号に何を入れたか記録しておく)
- 発泡スチロール容器に十分量の液体窒素を注ぐ
 - (#以降の操作を、サンプル数だけ繰り返します)

3. オートグリッドの作製

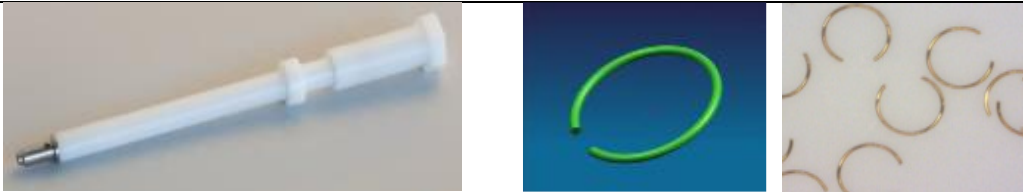
- Loading station に、再度、十分量の液体窒素を注ぐ
- CryoGrid Box (水色)のフタをシャーペン型治具にはめて、激しい沸騰が終わるまで待つ
- CryoGrid Box (水色)にフタをして、Loading station に移す

注意：**フタを扱う操作は静電気に注意。操作前にサンダルを脱いでアースする。**

- CryoGrid Box (水)のフタを外す

- C-clip insertion tool (白いシャーペンのような治具) に C-clip をはめる

注意：ゆがんだ C-clip を使うと電顕内で外れるので、**ゆがんだものは捨ててください！**



- C-clip ring を Loading station に入れて冷やす



- 先細ピンセットを 30 秒くらい冷やす
- C-clip ring を AutoGrid alignment tool (鉄)の中央に置く
- グリッドを C-clip ring にはまるように置く
- C-clip をはめた C-clip insertion tool の先端を激しい沸騰が終わるまで待つ
- C-clip をカチャンとはめる (この状態がオートグリッド)
- **AutoGrid alignment tool の土手から落とすなどして、正しくはまったことを確認**

注意：オートグリッドがきちんと組み立てられていないと、電顕内部でロボットアームがグリッドを掴み損ねて落ちたり、破片が落ちたりします。もしそうになると、Autoloader 内で落ちた場合は修理に数日、鏡筒内で落ちた場合は修理に 1-2 週間かかるので、共同利用の運営に大きな支障が出ます。オートグリッドがきちんとできていることを、必ず確認して下さい!!! 必要に応じて拡大鏡を使うと良いです。

- AutoGrid container (白)に収納 (どの番号に何を入れたか記録しておく)

4. オートグリッドを Cassette・NanoCab 経由で電顕へ入れる

- NanoCab に液体窒素を注ぎ足す
- 電顕の前に行って NanoCab をセットし、タッチパネルの Undock ボタンを押す
- Loading station に NanoCab をセット
- Cassette を NanoCab から Loading station に移動（把手の横のボタンを押すと掴む）



- AutoGrid tweezers（先が十字型のピンセット）を 30 秒から 1 分以上、冷やす



- AutoGrid tweezers で、オートグリッドを Cassette に移す（番号を記録しておく）
（*この時、C-clip ring が下(=普通に操作すると手前)になるように入れる）
- AutoGrid tweezers を縦にして軽く押し、
全てのグリッドがきちんとはまっていることを必ず確認する**

- Cassette を NanoCab に戻す（把手の横のボタンを押すと掴む）

注意：Cassette がコテから外れにくいのですが、NanoCab に入れたらボタンを離して、下側に押し当てるように、手首を返すようにコテを動かすと、Cassette が NanoCab に残ります。ここで、あまり無理にガチャガチャやると、オートグリッドがばらけてしまうので注意が必要です。

- NanoCab を Loading station から外す
- NanoCab に液体窒素を注ぎ足す
- NanoCab のピンが上がっていることを確認（上がってなければ指でつまみあげる）
- 電顕の前に行って NanoCab をセットし、タッチパネルの Dock ボタンを押す
（NanoCab がうまく認識されない場合、ピンを少し回すと認識されることがありますが、回しすぎるとピンが外れるので注意！）

II. 自動データ測定

*IV に示した電顕のセットアップが一通り終わってれば、以下をやれば OK です。

*TEM User Interface は version 1.13.1、EPU は version 2.2.0.65REL を使用しています。

1. Inventory と Column Valve の Open

(*左側の画面の TEM User Interface を使います)

• Autoloader>Temperature Control

NanoCab の Dock が終了したら、温度が全て緑になって、-160℃以下になるまで待つ

• Autoloader>Autoloader>Option

Inventory ボタンを押す

入れたグリッドが全て正しく認識されていたら OK

(正しく認識されなければ、もう一度 Inventory。それでダメなら FEI に電話します)

見たいグリッドをクリックして Load

• Setup>Vacuum

Col. Valves Closed というボタンを押して、Column Valve を開ける

2. EPU による自動測定 (*右側の画面の EPU を使います)

・ Preparation タブ

左上の Presets のプルダウンメニューから Atlas を選ぶ

上部右端のカメラマークを押して Preview 撮影

(この段階でグリッドが見えなければ、カラムバルブが閉じているので開けましょう。

氷が厚すぎる場合も何も見えませんが、うっすら Grid square が見えるはずです。

画像が欠けているなら、絞りが 50 になっているので 150 にしましょう。

それでもダメな場合は KEK スタッフか FEI に電話してください。)

・ Atlas タブ

Session Setup : New Session _____ (番号を記録しておく)

Atlas Acquisition : Start (*6x6 で全体像を撮影するのでしばらく待つ)

*KEK では、EPU による自動測定について、サンプルやグリッドの状態に応じて、以下の 5 通りの条件を用意しております。外部ユーザーの方は、基本的に#1-3 の条件をお使いください。なお、#4-5 は p.35-36 に記載してありますが、KEK スタッフが行います。

条件	位相板	モード	倍率	露光時間	Fraction	目的
#1	あり	Linear	92k	~4 秒*	12 枚	粒子状態/分布や氷の厚さを確認
#2	なし	Linear	92k	~4 秒*	40 枚	Over night で測定して解析
#3	なし	Linear	120k	~4 秒*	40 枚	Over night で測定して解析
#4	なし	Counting	92k	~65 秒*	~50 枚*	3 日連続測定して本解析
#5	なし	Counting	120k	~56 秒*	~50 枚*	3 日連続測定して本解析

*これらの設定は EPU の推奨値に従います

測定条件#1 : 位相板あり・Linear・92k・~4秒・12枚

Import で、E:/Preparation/001_PhP_Linear_92k_190326.xml を選択 (1.13A/pix)

・EPU タブ

Session Setup : New session _____ (番号を記録しておく)

(*保存先は Atlas と同じ folder へ。Quantifoil は R1.2/1.3 を選択)

Square Selection : Unselect All, ホイールで拡大, Add, Move stage to grid square

Hole selection : ひとまず Acquire で撮影。良い Square が確認。良ければ以下へ。

Search>Stage の option で z=180um に。

画像を右クリック。Move stage here で hole が明瞭に見える所へ

Auto Functions タブの Auto Eucentric by beam tilt を選ぶ

Hole/Eucentric の倍率にして Start を押す

EPU タブに戻り、Square 中央で Move stage here and acquire

measure Hole size, Find Hole, Quality Bar & Brush tool

Template definition : Acquire, **C2=50, Obj=PhP4 に変更**, Find and Center Hole

add Acquisition Area: Defocus = -1um

add Autofocus Area: after distance = 10um

add Drift Measurement Area: **once/grid**, 0.20nm/s

Template Execution : Preview

(* Set up>Aperture のオプションで位相板の Next ボタンを押す)

Automated Acquisition : Phase Plate Enabled を Yes にして、Start Run

測定条件#1 では、氷の厚い/薄い hole、もしくは hole の中央/端を丁寧に撮影して、hole の明るさ (filter ice quality) と粒子の有無などの相関を確認しましょう

(*撮影時の Skip 率が高い時は、Hole size, 高さ, アラインメントを再確認しましょう)

測定条件#2 : 位相板なし・Linear・92k・~4秒・40枚

Import で、E:/Preparation/002_Linear_92k_190326.sxml (1.13A/pix)

・EPU タブ

Session Setup : New session _____ (番号を記録しておく)

(*保存先は Atlas と同じ folder へ。Quantifoil は R1.2/1.3 を選択)

Square Selection : Unselect All, ホイールで拡大, Add, Move stage to grid square

Hole selection : ひとまず Acquire で撮影。良い Square が確認。良ければ以下へ。

Search>Stage の option で z=180um に。

画像を右クリック。Move stage here で hole が明瞭に見える所へ

Auto Functions タブの Auto Eucentric by beam tilt を選ぶ

Hole/Eucentric の倍率にして Start を押す

EPU タブに戻り、Square 中央で Move stage here and acquire

measure Hole size, Find Hole, Quality Bar & Brush tool

(複数の Square を選ぶなら、Square selection に戻る)

(必要なら、氷の厚さが異なるいくつかの hole, square を撮影)

カーボンの破れた所に移動して、Preparation タブの Dose Rate の measure を押す

(e/A^2 を枚数で割って、 $e/A^2/\text{fraction}$ を計算)

Template definition : Acquire, **C2=50, Obj=100 に変更**, Find and Center Hole

add Acquisition Area: Defocus = -0.5 - -1.5 or -1.5 - -3 um

add Autofocus Area: after distance = **Always**

add Drift Measurement Area: **Always**, 0.20nm/s

Template Execution : Preview

Automated Acquisition : Phase Plate Enabled を **No** にして、Start Run

測定条件#3 : 位相板なし・Linear・120k・~4秒・40枚

Import で、E:/Preparation/003_Linear_120k_190326.sxml (0.88A/pix)

・EPU タブ

Session Setup : New session _____ (番号を記録しておく)

(*保存先は Atlas と同じ folder へ。Quantifoil は R1.2/1.3 を選択)

Square Selection : Unselect All, ホイールで拡大, Add, Move stage to grid square

Hole selection : ひとまず Acquire で撮影。良い Square が確認。良ければ以下へ。

Search>Stage の option で z=180um に。

画像を右クリック。Move stage here で hole が明瞭に見える所へ

Auto Functions タブの Auto Eucentric by beam tilt を選ぶ

Hole/Eucentric の倍率にして Start を押す

EPU タブに戻り、Square 中央で Move stage here and acquire

measure Hole size, Find Hole, Quality Bar & Brush tool

(複数の Square を選ぶなら、Square selection に戻る)

(必要なら、氷の厚さが異なるいくつかの hole, square を撮影)

カーボンの破れた所に移動して、Preparation タブの Dose Rate の measure を押す

(e/A^2 を枚数で割って、 $e/A^2/\text{fraction}$ を計算)

Template definition : Acquire, **C2=50, Obj=100 に変更**, Find and Center Hole

add Acquisition Area: Defocus = -0.5 - -1.5 or -1.5 - -3 um

add Autofocus Area: after distance = **Always**

add Drift Measurement Area: **Always**, 0.20nm/s

Template Execution : Preview

Automated Acquisition : Phase Plate Enabled を **No** にして、Start Run

3. トラブルシューティング

・ 8500x の画像がおかしい（画像が変に拡大されてしまう）

→ 高さの設定がずれて、おそらく $z=0\mu\text{m}$ になっています。Hole selection の際に高さ設定ができていないので、Skip Grid Square をしてから、同じ Square を Reopen した後に Hole selection のところまで戻り、Auto Eucentric か Auto Function 経由で高さ合わせをするか、EPU の session を新しく作りなおして下さい。

・ 自動測定中、750x の画像と 8500x の画像で、選んでいる Hole が異なる

→ 倍率間の中心合わせがずれているなら再設定します。EPU がバグっている場合は、一度測定を stop して、EPU を落とし、再度 EPU を立ち上げると改善することが多いです。ただし、狙った hole の隣に氷の張っていない hole があると、そちらを選んでしまう傾向はあります。

・ EPU の測定がいきなり停止するなどして、TEM User Interface の中央下の Prot.の表示が、普段の%ではなく、「？」や「Do calibration」となる。（=こうなるとカメラが温まり、Cooling (F)が赤/橙色になります）

→ 何らかの理由で操作 PC から Falcon カメラへの通信が行きっぱなしになった場合にこうなるそうです。この場合、一度 Falcon カメラをリセットする必要があります。以下にいくつかの対策を示します。

対策 1：操作 PC を log off/log in するか、再起動する。（これで治ればラッキー）

対策 2：service 用の Microscope Software Launcher の Tools から、Camera and detector の Falcon Service Tool を選ぶ。現れた Window の CSU タブを選び、右下の Reboot CSU ボタンをクリックする。Basic Operations タブの Sensor temperature が下がり始めれば OK。-25℃まで下がって Cooling (F)が Stable (緑色)になるまで待つ。その後、Setup の FEG control の Guns lens の値を、4.2 から 4.1 にして、4.2 に戻すと、Do calibration が解除されるはずです。

対策 3：操作 PC を shut down した状態で、Falcon カメラコントローラーの電源ケーブルを一度抜いて刺し、PC を起動する。

・ 画像に水滴のようなものが見える

→位相板がチャージアップしすぎか、位相板にゴミがついています。Next ボタンで場所を変えるか、PhP2,3,4,5,6 などを使いましょう。

・ いきなりブレーカーが落ちた

→ 原因はよくわかりませんが、こうなったら基本的に、KEK スタッフか FEI に電話してください。念のため、復旧方法を以下に示します。

- 操作室の外に出て、電顕のブレーカーが落ちていることを確認
- 電顕室に戻り、電顕の操作 PC の少し上にある、メインスイッチを OFF にする
- ブレーカーを ON にしてから、メインスイッチを ON
- 操作 PC の起動後、User 用 Launcher で TUI を起動 (Hang up したら操作 PC を restart)
- User 用 Launcher を Exit して、Service 用 Launcher を立ち上げる
- Tools から、Vacuum test を選んで、
 - Manual Mode を click してから、IGPa, IGPCo を click
 - それぞれが緑になったら、もう一度 Manual Mode を click
 - Evacuate All を押す
- Tools から、Autoloader Vacuum を選んで、Pump を押す
- Aperture の Option の Enable タブで、C2, Obj, SA を黄色にする
- FEG control の Option を見て、Power が押せるようになったら押す
- Auto Loader の Option を見て、Initialize
- Setup の High tension が押せるようになるまで待つ。
- 電源が落ちてから (or 落としてから) すぐ復帰するときは Warm start
- High tension の Option を見ながら、電圧を 80kV から 200kV に上げていく
- Ceta と Falcon を認識しない場合、TUI を再起動か、電源ボードのケーブルを抜き差し
- Tools から、Camera and detector の Falcon service tool を選ぶ
- CSU のタブを選んで待つ。だめなら Reboot する。(温度が -18℃/-25℃になるはず)
- Alignment の Option を押して、File から 200 を選び、
 - 一連の Alignment File を右から左へ移して Apply
- FEG register の file で、200kV TEM を選んで set
- Auto Loader>Temp Control の Status を見て、
 - Error が出てたら Option>State の Recover を押す

・自動測定中、Autofocus did not converge のエラーが出た

→ Tomography TEM で 22,000x, -10um など AutoFocus の Calibration をした後、EPU で 92,000x で自動測定しようとする、倍率が違いすぎるのでエラーが出ます。この場合、KEK スタッフを呼んでください。以下の通りに対応いたします。（*この操作は勝手に行わないでください！）

- 一通りのアラインメントを行う（*特に pivot point と高さがないとダメ）
- Preparation tag で Hole/Eucentric にして set
- カーボン膜上に移動
- Hole/Eucentric にして Auto Eucentric by stage tilt
- Preparation tag で Data Acquisition にして set
- Data Acquisition にして Auto Eucentric by stage tilt
- AutoFunction tag で、Data Acquisition を選ぶ
- Calibration の AutoFocus を選んでスタート
- あとは指示にしたがって進む

III. 後片付け

・ Vitrobot の終了

- 扉を閉めて、タッチパネルの Exit を押す (Yes/No をきいてくるので Yes)
- しばらく経つと画面が暗くなるのでスイッチを切る
- Humidifier を外して、中の水を捨てる (よく振って捨てる)
- ろ紙を外して捨てる
- 扉は開けて中を乾燥させておく

・ Vitrobot 用の発泡スチロール容器

- 全てのパーツをばらして、キムタオルの上に並べる
 - そのまま置いて乾燥させる
- (*すぐに次の実験をしたい場合は、金属パーツはドライヤーで乾かし、
発泡スチロール部分はキムワイブなどで完全に水気をとる)

・ Loading station

- 全てのパーツをばらして、キムタオルの上に並べる
 - そのまま置いて乾燥させる
- (*すぐに次の実験をしたい場合は、他のよく乾いた Loading station を使う)

・ NanoCab の冷却

- 液体窒素を捨てて、横向きにして乾かす
- (*すぐに次の実験をしたい場合は、他のよく乾いた NanoCab を使う)

注意：帰る前に必ず、以下の **4 点** について確認して下さい。

- ・ 電顕の **Column Valve** を閉じる (EPU で測定中なら測定後に閉じるボタンを押す)
- ・ 電顕を使ってない時は **位相板** を抜く (入れたまま真空が飛ぶと位相板が破れます)
- ・ 電顕を使ってない時は **カメラ** をはずす (何かの弾みでカメラが壊れるのを防げます)
- ・ **エタンガスポンベ** の Valve を閉じる

IV. 自動測定をする前に必要なセットアップ

1. Conditioning (月 1 回 : 電顕内部のゴミ飛ばし。1-2 日かかるので暇な週末にやる)

- Autoloader>Temperature Control のオプションから State を選ぶ
- Go to を Conditioning Both で↵を押す
- After Conditioning のところは、
 - Go to All Nitrogen temperature
 - At を復帰させたい日時にして↵を押す

2. およそのアライメント (毎日)

- Grid なしの状態で行う (もしくは Grid に穴のあいたところで行う)
- EPU の Preparation タブの Import で 001,002,003_.sxml file のいずれかを読み込む
- Column Valves を開く (蛍光板を下ろして光が来ているかを確認)
- Alignment の FEG register で、200kV TEM を選んで set
- Alignment の Option を押して、File から 200 を選び、
 - 一連の Alignment File を右から左へ移して Apply

3. C2 絞りの中心合わせ（ずれていると思ったら、その都度あわせる）

- Grid なしの状態で行う（もしくは Grid に穴のあいたところで行う）
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして set
- 操作パネルの Eucentric focus ボタンを押す（*92k で Obj lens=86.5740）**
- C2=50, Obj=none になっていることを確認。蛍光板を下ろし、倍率を 17500 倍に。

1 回目

- Intensity ダイアルを左に回してビームを絞る
- Direct Alignment から Beam shift を選び、Multi function ダイアルで光を中央に移動
- Intensity 右に回して光を画面いっぱい広げる
- C2 の横の Adjust を押して、Multi function ダイアルで、
光の円が画面の四辺に接するように移動する
- C2 の横の Adjust をもう一度押す

2 回目

- もう一度ビームを絞って、Multi function ダイアルで光を中央に移動
- Intensity 右に回して光を画面いっぱい広げる
- C2 の横の Adjust を押して、Multi function ダイアルで、
光の円が画面の四辺に接するように移動する
- C2 の横の Adjust をもう一度押す
（*ビームを絞った時も広げた時も中央にくるように、以上を何回か繰り返す）
- Direct Alignment の Beam shift を Done する（*光の輪がほぼ同心円状に広がれば OK）

- C2=150 については確認のみで OK（Beam shift で光を動かさない）

4. ピボットポイントの調整（毎日：ビームティルトの設定）

- Grid なしの状態で行う（もしくは Grid に穴のあいたところで行う）
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして Set,
- C2=50, Obj=none になっていることを確認。蛍光板を下ろす。
- 倍率を 28000 倍にして、Intensity で光を絞る
- Direct Alignment から、nP Beamtilt pp X を選ぶ
- Multi Function ダイアル X (と Y) で、点滅する 2 つの光が重なるように微調整する
- Direct Alignment から、nP Beamtilt pp Y を選んで同様に合わせる
(*この後、AutoCTF でコマ収差を除くので、ある程度あっていれば良いそうです)
- Done を押す

5. Rotation Center（毎日：電流軸を対物レンズの中心に通す）

- Autoloader を使って、何かグリッドを入れる
- Column Valve を Open して、EPU の Preparation タブで Atlas の Preview をとる
- Move stage here で、目立つゴミのあるところへ移動
- EPU の Preparation タブで Grid Square の Preview をとる
- Move stage here で、目立つゴミのあるところへ移動
- Search>Stage の option で z=180um に合わせる
- EPU の Preparation タブで Hole/Eucentric の Preview をとる
- Move stage here で、目立つゴミのある近くへ移動
- EPU の Auto Functions タブで、Hole/Eucentric にして Auto Eucentric by stage tilt

- 倍率を 8500 倍から倍率 57000 倍にする。C2=150, Obj=none。
- 蛍光板を下ろす。このままだと暗くて何も見えないので Intensity を左に回す
- 目立つゴミを探して画面の中心に持ってくる
- Direct Alignment から、Rotation Center を選ぶ。
Multi Function ダイアルで、ゴミが上下左右に動かなくなるように微調整する
(*この後、AutoCTF で非点収差を除くので、ある程度あっていれば良いそうです)
- Done を押す

6. 位相板への焦点合わせ（毎日）

(*透過波だけの位相を変えたいが、位相板のところでビームが点になっていないと、散乱波も位相がずれてしまうので、位相板のある後焦点面に焦点を合わせる。)

位相板ヒーターの電源が入っていることを確認 (*電源 ON にした後は 2 時間程待つ)

蛍光板を上げる

EPU の EPU タブの Square selection など、やぶけて穴が空いているところに移動

蛍光板を下げる

Preparation タブで、Data Acquisition で Set

倍率を 13500 倍に下げて、C2: 150 (視野を広げる)、**位相板 (PhP4) を入れる**

(*位相板の position の 10 番台などは位相板の影が出るので使わないほうが良い)

TUI の表示モードを Linear にする (そのほうが見やすい)

ヒストグラムのところピークのみを選んで、もやもやが見えるようにする

Intensity を Fine にして、左右に回して focus を合わせる

(*Intensity を回すと、もやもや→縦シマ→白→横シマ→もやもや、などと変わるので、左右に行ったり来たりして、シマシマの向きが 90 度変わるところを探す)

Stigmator を Condensor にして、Multifunction X,Y で後焦点面に焦点を合わせる

(*それなりにコツがいるが、シマシマを伸ばす感じでやると上手くいく。

シマシマが見えるのは、ビームが楕円になっているということ)

終わったら、像が消えるところで Intensity ダイアルを止めて (=Just focus)

None を押す (***これ以降、Intensity ダイアルは触らないこと**)

Phase plate は、Setup>Apertures の Option>Phase Plate を選んで、Next を押す

TUI の表示モードを Natural に戻す

倍率 92000 倍、C2 絞りを 50、Obj 絞りを PhP4 or 100 にする

EPU の Preparation タブで、

Data Acquisition にして Get

Autofocus にして Get

Drift Measurement にして Get

*参考：平行照射になる C2 Lens の目安の値 (%)

Spot 8: 37.8%, Spot 7: 38.5%, Spot 6: 39.55%, Spot 5: 40.7%, **Spot 4: 42.0%**

7. 対物絞りの中心合わせ（毎日）

- 位相板への焦点合わせの後に行う（=平行照射の状態で行う）
- 蛍光板を上げて、ゴミのあるところに移動
- EPU の Auto Functions タブで、Hole/Eucentric にして Auto Eucentric by stage tilt

- EPU の Preparation タブで Hole/Eucentric にして撮影。ゴミのないカーボン面に移動
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして set
- C2=50, Obj=none。
- 必ず蛍光板を下ろす
 - （*蛍光板を下ろさずに Diffraction ボタンを押すとカメラが壊れることがあります）**
 - Diffraction のボタンを押す（EPU でエラーが出るが、無視して次に進む）
 - Obj=100（*Diffraction モードにすると対物絞りが外れるので、入れ直しましょう）
 - TUI は HDR モードにする
 - *ほぼ合っているはずなので、一応確認はするが、以下 3 点はやらないほうが無難
- （Objective の横の Adjust を押す）
- （Multi Function ダイヤルで、明るい光の中心とぼやとした光の中心が合うようにする）
- （Objective の横の Adjust をもう一度押す）
- Diffraction ボタンをもう一度押して終了（EPU のエラーに対しては Yes を押す）

8. AutoCTF (毎日：非点収差・コマ収差の補正)

- ゴミのあまりないカーボン膜上に移動
- Hole/Eucentric の倍率で高さ合わせ
- Reset Defocus (=R2 を押す)

- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition で Set (**C2: 50, Obj: none**)
- 倍率 57000 倍にする
- 光がずれていたら、Beam Shift で中央に
- もう一度、Data Acquisition で Set して、倍率 57000 倍にする
- 蛍光板を上げる
- カメラを Falcon にする (Autoloader>CCD/TV Camera で BM-Falcon にして Insert)
- Microscope Software Launcher の Tools から Sherpa を立ち上げる(少し時間かかる)
(*Auto Functions タブ経由でも可能ですが、失敗してもエラーが出ない点がイマイチ)

- Linear mode なら Electron counting のボックスのチェックは外す。
(Exp.: 4, Binning: 2, Readout: Full, Auto-focus-to: チェックして-2.0)
- Objective Stigmatism の Measure を押す
(トーンリングが拾えなければ Focus ダイアルを回して Defocus を-800nm かける)
- トーンリングが拾えたら、Correct を押す
(対物レンズの非点収差をとってくれる。光があまり暗いと拾ってくれない)
(途中で Stop しないこと。Stop すると途中の変な状態で止まってしまう)

- 右下に Passed と出たら、Coma の Correct を押す (コマ収差をとってくれる)

- 右下に Passed と出たら、**C2: 50, Obj: 100** にして、
もう一度、Objective Stigmatism の Correct を押す
(*1 次の収差が focus、2 次の収差が非点収差、3 次の収差がコマ収差)

(*対物レンズの収差がひどくて AutoCTF ができない場合は、Eucentric focus ボタンを押して Objective lens の値をリセットするか、Alignment の Option を押して File から 200kV を選び、一連の Alignment File を右から左へ移して Apply します。)

9. EPU における dose, fraction の設定 (毎日)

- Grid に穴のあいたところに移動
- EPU の Preparation タブの Presets を Data Acquisition にして Set
- C2: 50, Obj: 100
- Exposure Settings を、Linear, Manual, No, Dose= ~ 50 , Fractions=12 or 40 にする
- Dose Rate のところの Measure ボタンを押す
- Exp. time= ~ 4 になったことを確認 (~ 14.5 e/px/s くらいになるはず)
- EPU の Preparation タブで、
 - Data Acquisition にして Get
 - Autofocus にして Get
 - Drift Measurement にして Get

10. Gain reference (週 1 回 : カメラのゼロ点合わせ)

- Grid なしの状態で行う (もしくは Grid に穴のあいたところで行う)
- 蛍光板を下げる
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして Set
- 倍率: 36000、C2: 150、Obj: 100。光が画面全体に当たっていることを確認。
- CCD/TV camera のオプションから Bias Gain を選ぶ
- Reference Image Manager を押す
- Linear mode なので、normal@日付のファイルを選ぶ
- 蛍光板を上げて、measure dose を押す
- バーが緑の範囲に入っていないければ、Intensity, Spot size, Mag で調節
- 蛍光板を上げて、measure dose を押す (35%くらいになるはず)
- 以上の手続きを繰り返して、バーを緑の中に入れる
 - (*値が小さすぎる場合は、Beam Blank や Camera Insert がおかしくないか確認。
 - なお、平行照射にしたいので **Spot size: 4 なら C2 Lens 42.0%**くらいのはず)
- バーが緑の範囲に来たら Exp:10, #Image to Average: 4 として
Acquired Selected Gain Reference を押す
- 日付が update されたことを確認
- EPU の Preparation タブの Data Acq, Preview で、像が flat なことを確認して完了

11. EPU の倍率間の中心合わせ (毎日)

- Atlas で、低倍率から高倍率まで見えそうな、目立つゴミを探す
- Preparation タブに戻って、Calibrate Image Shifts、Start Calibration
- 92000x で見る。よければ Proceed
- 8500x で見る。92000x と対応する場所をダブルクリックして Proceed
- 700x で見る。8500x と対応する場所をダブルクリックして Proceed
- 115x で見る。700x と対応する場所をダブルクリックして Proceed
- finish successfully と出たら終わり

12. EPU のリスタート (必要に応じて)

- EPU の window が開いてたら、閉じる。
- Windows の Start から、EPU を立ち上げれば OK。

13. EPU の Preparation の設定 (必要に応じて)

以下に、EPU の Preparation の設定例を、参考として示す。

測定条件#1 : Linear mode_92k (*E:/Preparation/001_PhP_Linear_92k.sxml_190326)

	Camera	Binning	Readout	Exp. time, etc.	Probe	Mag	Defocus	Spotsize	Int.
Atlas	Falcon	2	Full	0.50	Micro	115x	-1000	8	1.103
Grid Sq	Falcon	2	Full	1.00	Micro	700x	-200	8	0.588
Hole/ Eucentric	Falcon	2	Full	Linear,No 1.00	Nano	8500x	-50	8	0.548
Data Acq	Falcon	1	Full	Linear,Man,No ~50e/Å ² ~4sec, 12 frac	Nano	92000x	-2	4	0.456
Autofocus	Falcon	2	Full	Linear,No 0.50	Nano	92000x	なし	4	0.456
Drift mes	Falcon	2	Full	Linear,No 1.00	Nano	92000x	-5	4	0.456

*~4 e/A²/fraction

測定条件#2 : Linear mode_92k (*E:/Preparation/002_Linear_92k.sxml_190326)

	Camera	Binning	Readout	Exp. time, etc.	Probe	Mag	Defocus	Spotsize	Int.
Data Acq	Falcon	1	Full	Linear,Man,No ~50e/Å ² , ~4sec, 40 frac	Nano	92000x	-2	4	0.456
Autofocus	Falcon	2	Full	Linear,No 0.50	Nano	92000x	なし	4	0.456
Drift mes	Falcon	2	Full	Linear,No 1.00	Nano	92000x	-5	4	0.456

*~1.25 e/A²/fraction

測定条件#3 : Linear mode_120k (*E:/Preparation/003_Linear_120k.sxml_190326)

	Camera	Binning	Readout	Exp. time, etc.	Probe	Mag	Defocus	Spotsize	Int.
Data Acq	Falcon	1	Full	Linear,Man,No ~50e/Å ² , ~4sec, 40 frac	Nano	120000x	-2	4	0.456
Autofocus	Falcon	2	Full	Linear,No 0.50	Nano	120000x	なし	4	0.456
Drift mes	Falcon	2	Full	Linear,No 1.00	Nano	120000x	-5	4	0.456

*~1.25 e/A²/fraction

測定条件#4 : Counting mode_92k (*E:/Preparation/004_Counting_92k.xml_190326)

参考例	Camera	Binning	Readout	Exp. time, etc.	Probe	Mag	Defocus	Spotsize	Int.
Data Acq	Falcon	1	Full	Counted,Auto,No ~50e/Å ² , ~65sec, ~50 frac	Nano	92000x	-2	8	0.394
Autofocus	Falcon	2	Full	Linear,No 0.50	Nano	92000x	なし	8	0.394
Drift mes	Falcon	2	Full	Linear,No 1.00	Nano	92000x	-5	8	0.394

*~1.00 e/Å²/fraction

測定条件#5 : Counting mode_120k (*E:/Preparation/005_Counting_120k.xml_190326)

参考例	Camera	Binning	Readout	Exp. time, etc.	Probe	Mag	Defocus	Spotsize	Int.
Data Acq	Falcon	1	Full	Counted,Auto,No ~50e/Å ² , ~56sec, ~50 frac	Nano	120000x	-2	8	0.394
Autofocus	Falcon	2	Full	Linear,No 0.50	Nano	120000x	なし	8	0.394
Drift mes	Falcon	2	Full	Linear,No 1.00	Nano	120000x	-5	8	0.394

*~1.00 e/Å²/fraction

14. グリッドのアセトン処理（必要に応じて）

- 作業はステンレス机の上で行う
 - （*普通の机だと、アセトンで机の表面が溶けてシャーレが机にくっつくことがある）
- ガラスシャーレにろ紙を敷く
- ろ紙の上に、丁寧にグリッドを 25 枚くらい並べる（静電気に注意）
- グリッドが浸るように、ゆっくりアセトンを注ぐ
- 室温で静置（over night）
 - （*カーボングリッド作成時に残ったプラスチックが溶けるので、親水性が上がる）
- キムワイブなどでアセトンをできるだけ吸い取る
- ピンセットで新しいろ紙の上にグリッドを移動させる
- ガラスシャーレでフタをして、1 時間は置いて乾燥させる
- グリッドを白い長方形のグリッドボックスに収納
 - （*静電気に注意。グリッドボックスのフタでグリッドを曲げぬよう注意）

15. グリッド作製の液体窒素の補充（必要に応じて）

- 朝、5L シーベル x2 本に、120L 液体窒素タンクから汲み出す

16. 電顕用の 250L 液体窒素タンクの交換（2 週間に 1 回くらい）

- Autoloader の Option から、Fill Now を選んでしばらく待つ
- バルブを全て閉じる（取り出し口の緑と、黒）
- 電顕とつながっている黒いホースとプラスチックチューブを外す
- 250L 液体窒素タンクを入れ替え
- 電顕とつながっている黒いホースとプラスチックチューブをつなげる
- 取り出し口の緑と、黒を全開

17. Counting mode での撮影（高分解能解析用の画像を撮る場合）

・およそのアラインメント

- Grid なしの状態で行う（もしくは Grid に穴のあいたところで行う）
- EPU の Preparation タブの Import で、004_.sxml または 005_.sxml file を読み込む
- Column Valves を開く（蛍光板を下ろして光が来ているかを確認）
- Alignment の FEG register で、200kV TEM を選んで set
- Alignment の Option を押して、File から 200 を選び、
一連の Alignment File を右から左へ移して Apply

・C2 絞りの中心合わせ

- Grid なしの状態で行う（もしくは Grid に穴のあいたところで行う）
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして set。
- 操作パネルの Eucentric focus ボタンを押す（*92k で Obj lens=86.5740）**
- C2=50, Obj=none になっていることを確認。蛍光板を下ろし、倍率を 17500 倍に。

1 回目

- Intensity ダイアルを左に回してビームを絞る
- Direct Alignment から Beam shift を選び、Multi function ダイアルで光を中央に移動
- Intensity 右に回して光を画面いっぱい広げる
- C2 の横の Adjust を押して、Multi function ダイアルで、
光の円が画面の四辺に接するように移動する
- C2 の横の Adjust をもう一度押す

2 回目

- もう一度ビームを絞って、Multi function ダイアルで光を中央に移動
- Intensity 右に回して光を画面いっぱい広げる
- C2 の横の Adjust を押して、Multi function ダイアルで、
光の円が画面の四辺に接するように移動する
- C2 の横の Adjust をもう一度押す
(*ビームを絞った時も広げた時も中央にくるよう、以上を何回か繰り返す)
- Direct Alignment の Beam shift を Done する(*光の輪がほぼ同心円状に広がれば OK)
- C2=150 については確認のみで OK (Beam shift で光を動かさない)

・ ピボットポイントの調整

- Grid なしの状態で行う（もしくは Grid に穴のあいたところで行う）
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして Set,
- C2=50, Obj=none になっていることを確認。蛍光板を下ろす。
- 倍率を 28000 倍にして、Intensity で光を絞る
- Direct Alignment から、nP Beamtilt pp X を選ぶ
- Multi Function ダイアル X (と Y) で、点滅する 2 つの光が重なるように微調整する
- Direct Alignment から、nP Beamtilt pp Y を選んで同様に合わせる
(*この後、AutoCTF でコマ収差を除くので、ある程度あっていれば良いそうです)
- Done を押す

・ Rotation Center

- Autoloader を使って、何かグリッドを入れる
- Column Valve を Open して、EPU の Preparation タブで Atlas の Preview をとる
- Move stage here で、目立つゴミのあるところへ移動
- EPU の Preparation タブで Grid Square の Preview をとる
- Move stage here で、目立つゴミのあるところへ移動
- Search>Stage の option で z=180um に合わせる
- EPU の Preparation タブで Hole/Eucentric の Preview をとる
- Move stage here で、目立つゴミのある近くへ移動
- EPU の Auto Functions タブで、Hole/Eucentric にして Auto Eucentric by stage tilt

- 倍率を 8500 倍から倍率 57000 倍にする。C2=150, Obj=none。
- 蛍光板を下ろす。このままだと暗くて何も見えないので Intensity を左に回す
- 目立つゴミを探して画面の中心に持ってくる
- Direct Alignment から、Rotation Center を選ぶ。
Multi Function ダイアルで、ゴミが上下左右に動かなくなるように微調整する
(*この後、AutoCTF で非点収差を除くので、ある程度あっていれば良いそうです)
- Done を押す

・位相板への焦点合わせ

(*透過波だけの位相を変えたいが、位相板のところでビームが点になっていないと、散乱波も位相がずれてしまうので、位相板のある後焦点面に焦点を合わせる。)

位相板ヒーターの電源が入っていることを確認 (*電源 ON にした後は 2 時間程待つ)

蛍光板を上げる

EPU の EPU タブの Square selection など、やぶけて穴が空いているところに移動

蛍光板を下げる

Preparation タブで、Data Acquisition で Set

倍率を 13500 倍に下げて、C2: 150 (視野を広げる)、**位相板 (PhP4) を入れる**

(*位相板の position の 10 番台などは位相板の影が出るので使わないほうが良い)

TUI の表示モードを Linear にする (そのほうが見やすい)

ヒストグラムのところピークのみを選んで、もやもやが見えるようにする

Intensity を Fine にして、左右に回して focus を合わせる

(*Intensity を回すと、もやもや→縦シマ→白→横シマ→もやもや、などと変わるので、左右に行ったり来たりして、シマシマの向きが 90 度変わるところを探す)

Stigmator を Condensor にして、Multifunction X,Y で後焦点面に焦点を合わせる

(*それなりにコツがいるが、シマシマを伸ばす感じでやると上手くいく。

シマシマが見えるのは、ビームが楕円になっているということ)

終わったら、像が消えるところで Intensity ダイアルを止めて (=Just focus)

None を押す (***これ以降、Intensity ダイアルは触らないこと**)

Phase plate は、Setup>Apertures の Option>Phase Plate を選んで、Next を押す

TUI の表示モードを Natural に戻す

倍率 92000 倍 or 120000 倍、C2 絞りを 50、Obj 絞りを 100 にする

EPU の Preparation タブで、

Data Acquisition にして Get

Autofocus にして Get

Drift Measurement にして Get

*参考：平行照射になる C2 Lens の目安の値 (%)

Spot 8: 37.8%, Spot 7: 38.5%, Spot 6: 39.55%, Spot 5: 40.7%, Spot 4: 42.0%

・対物絞りの中心合わせ

- 位相板への焦点合わせの後に行う（=平行照射の状態で行う）
- 蛍光板を上げて、ゴミのあるところに移動
- EPU の Auto Functions タブで、Hole/Eucentric にして Auto Eucentric by stage tilt

- EPU の Preparation タブで Hole/Eucentric にして撮影。ゴミのないカーボン面に移動
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして set
- C2=50, Obj=none。
- 必ず蛍光板を下ろす
 - （*蛍光板を下ろさずに Diffraction ボタンを押すとカメラが壊れることがあります）**
 - Diffraction のボタンを押す（EPU でエラーが出るが、無視して次に進む）
 - Obj=100（*Diffraction モードにすると対物絞りが外れるので、入れ直しましょう）
 - TUI は HDR モードにする
 - *ほぼ合っているはずなので、一応確認はするが、以下 3 点はやらないほうが無難
- （Objective の横の Adjust を押す）
- （Multi Function ダイヤルで、明るい光の中心とぼやとした光の中心が合うようにする）
- （Objective の横の Adjust をもう一度押す）
- Diffraction ボタンをもう一度押して終了（EPU のエラーに対しては Yes を押す）

・AutoCTF

- ゴミのあまりないカーボン膜上に移動
 - Hole/Eucentric の倍率で高さ合わせ
 - Reset Defocus (=R2 を押す)

 - EPU の Preparation タブで、Data Acquisition で Set (**C2: 50, Obj: none**)
 - 倍率 92000 倍 or 120000 倍のまま
 - 光がずれていたら、Beam Shift で中央に
 - もう一度、Data Acquisition で Set して、倍率 92000 倍 or 120000 倍のまま
 - 蛍光板を上げる
 - カメラを Falcon にする (Autoloader>CCD/TV Camera で BM-Falcon にして Insert)
 - Microscope Software Launcher の Tools から Sherpa を立ち上げる (少し時間かかる)
(*Auto Functions タブ経由でも可能ですが、失敗してもエラーが出ない点がイマイチ)

 - Electron counting のボックスにチェックを入れる**
(**Exp.: 8**, Binning: 2, Readout: Full, Auto-focus-to: チェックして-2.0)
 - Objective Stigmatism の Measure を押す
(トーンリングが拾えなければ Focus ダイアルを回して Defocus を-800nm かける)
 - トーンリングが拾えたら、Correct を押す
(対物レンズの非点収差をとってくれる。光があまり暗いと拾ってくれない)
(途中で Stop しないこと。Stop すると途中の変な状態で止まってしまう)

 - 右下に Passed と出たら、Coma の Correct を押す (コマ収差をとってくれる)
- *Linear mode で AutoCTF をした後に、EC mode で AutoCTF をすると、Spot size が 4 から 8 になっているため、成功しても Thon ring の見た目がイマイチな場合があります。その時は、Objective Stigmatism-Coma をもう一度やるのが良いでしょう
- 右下に Passed と出たら、**C2: 50, Obj: 100** にして、
もう一度、Objective Stigmatism の Correct を押す
(*1 次の収差が focus、2 次の収差が非点収差、3 次の収差がコマ収差)

・ EPU における dose, fraction の設定

- Grid に穴のあいたところに移動
- EPU の Preparation タブの Presets を Data Acquisition にして Set
- C2: 50, Obj: 100
- Exposure Settings を、Counted, Auto, No, Dose= ~ 50 にする
- Dose Rate のところの Measure ボタンを押す
- 92000 倍なら Exp. time= ~ 65 , Fractions= ~ 50 になるはず (0.97 e/px/s くらい)
120000 倍なら Exp. time= ~ 56 , Fractions= ~ 50 になるはず (0.69 e/px/s くらい)
- EPU の Preparation タブで、
 - Data Acquisition にして Get
 - Autofocus にして Get
 - Drift Measurement にして Get

*参考：東大の Talos Arctica での設定 (位相板なし・Counting mode)

Mag. 190Kx, Spot 7

C2 38.455 % for acquisition (parallel illumination)

C2 33.500 % for focusing

Pixel size (uncalibrated) 0.76 A/pix

Exposure rate (no sample): 0.78 e/pix/s

Total dose 50 e/A2

48 fractions (movie frames)

Exposure time 37.70 s, Align "Yes" (←KEK だと No にしたほうが良いかも,,,))

・ Counting mode 用の Gain Reference をとる (*90 分以上かかります)

- Grid なしの状態で行う (もしくは Grid に穴のあいたところで行う)
- 蛍光板を下げる
- EPU の Preparation タブで、Data Acquisition にして Set
- 倍率: 92K or 120K、C2: 50、Obj: 100、Spot size: 8。
光が画面全体に当たっていることを確認。

- CCD/TV camera のオプションから Bias Gain を選ぶ
- Reference Image Manager を押す
- Counting mode なので、pre_ec@日付のファイルを選ぶ
- 蛍光板を上げて、measure dose を押す
- バーは緑の範囲に入っているはず (もしも入ってなければ何かおかしい)
(*Falcon III は 0.7 el/pix が適切とのこと)
(*値が小さすぎる場合は、蛍光板, Beam Blank, Camera Insert が正しいかを確認。
なお、平行照射にしたいので **Spot size: 8 なら C2 Lens 37.8%**くらいにする)

- バーが緑の範囲に来たら、Acquired Selected Gain Reference を押す (45 分かかる)
- 日付が update されたことを確認

- post_ec@日付についても同様にやる (45 分かかる)

- EPU の Preparation タブの Data Acq, Preview で、像が flat なことを確認して完了

測定条件#4 : 位相板なし・Counting・92k・~65 秒・~50 枚

Import で、E:/Preparation/004_Counting_92k_190326.xml (1.13A/pix)

・EPU タブ

Session Setup : New session _____ (番号を記録しておく)

(*保存先は Atlas と同じ folder へ。Quantifoil は R1.2/1.3 を選択)

Square Selection : Unselect All, ホイールで拡大, Add, Move stage to grid square

Hole selection : ひとまず Acquire で撮影。良い Square が確認。良ければ以下へ。

Search>Stage の option で z=180um に。

画像を右クリック。Move stage here で hole が明瞭に見える所へ

Auto Functions タブの Auto Eucentric by beam tilt を選ぶ

Hole/Eucentric の倍率にして Start を押す

EPU タブに戻り、Square 中央で Move stage here and acquire

measure Hole size, Find Hole, Quality Bar & Brush tool

(複数の Square を選ぶなら、Square selection に戻る)

(必要なら、氷の厚さが異なるいくつかの hole, square を撮影)

カーボンの破れた所に移動して、Preparation タブの Dose Rate の measure を押す

(e/A^2 を枚数で割って、 $e/A^2/\text{fraction}$ を計算)

Template definition : Acquire, **C2=50, Obj=100 に変更**, Find and Center Hole

add Acquisition Area: Defocus = -0.5 - -1.5 or -1.5 - -3 um

add Autofocus Area: after distance = **Always**

add Drift Measurement Area: **Always**, 0.20nm/s

Template Execution : Preview

Automated Acquisition : Phase Plate Enabled を **No** にして、Start Run

測定条件# 5 : 位相板なし・Counting・120k・~56 秒・~50 枚

Import で、E:/Preparation/005_Counting_120k_190326.xml (0.88A/pix)

・EPU タブ

Session Setup : New session _____ (番号を記録しておく)

(*保存先は Atlas と同じ folder へ。Quantifoil は R1.2/1.3 を選択)

Square Selection : Unselect All, ホイールで拡大, Add, Move stage to grid square

Hole selection : ひとまず Acquire で撮影。良い Square が確認。良ければ以下へ。

Search>Stage の option で z=180um に。

画像を右クリック。Move stage here で hole が明瞭に見える所へ

Auto Functions タブの Auto Eucentric by beam tilt を選ぶ

Hole/Eucentric の倍率にして Start を押す

EPU タブに戻り、Square 中央で Move stage here and acquire

measure Hole size, Find Hole, Quality Bar & Brush tool

(複数の Square を選ぶなら、Square selection に戻る)

(必要なら、氷の厚さが異なるいくつかの hole, square を撮影)

カーボンの破れた所に移動して、Preparation タブの Dose Rate の measure を押す

(e/A^2 を枚数で割って、 $e/A^2/\text{fraction}$ を計算)

Template definition : Acquire, **C2=50, Obj=100 に変更**, Find and Center Hole

add Acquisition Area: Defocus = -0.5 - -1.5 or -1.5 - -3 um

add Autofocus Area: after distance = **Always**

add Drift Measurement Area: **Always**, 0.20nm/s

Template Execution : Preview

Automated Acquisition : Phase Plate Enabled を **No** にして、Start Run

18. 電顕のシャットダウンと立ち上げ（停電前や故障時）

・電顕のシャットダウン

グリッドやカセットの取り出し

- unload, undock (*Nanocab に液体窒素を入れる必要はない)
- 温度表示が緑に戻るまで待つ

Conditioning

- Autoloader>Temp Control の Option で、Conditioning both を選んで↔
- After conditioning は go to All Room Temp にする
- Dewer が 0%になるまで待つ
- 温度が 0℃を越えるまで待つ（**半日くらいかかります！**）

Gun の OFF

- EPU を落とす
- Setup>FEG Control の Operate をクリックして灰色にする
- Option の power をクリックして、✓をクリック

温度が 0℃を越えたら、、、

- 操作 PC の Remote desk top で、Falcon server を shut down
- Software manager で電顕マーク右の□を右クリックして
Stop all を押してから、PC 落とす（操作 PC、Support PC 共に）
- 電源のメイン電源を落とす
- チラーをとめる（OFF ボタンを押す）
- Talos Arctica のブレーカーを落とす

・電顕の立ち上げ

電源関連

- ブレーカー, チラー, 電顕本体, 位相板ヒーターの電源を ON
- ガンの Back up 電源をしばらく OFF(真空が良すぎるとガンを Start できないので)
- Falcon server, 操作 PC, サポート PC を ON

TEM User Interface 関連

- Software Launcher から、TEM User Interface を立ち上げる。
(Hang up したら操作 PC を restart。立ち上がったら service 用に切り替え)
- Setup>Vacuum の Option の Control から To “All Vacuum”を押す。
(*Setup>FEG Control の Option の Power が押せるようになるまで待つ)
- Autoloader>Autoloader の Option の Vacuum ON が押せるようになったら押す。
- Setup>FEG Control の Option の Power が押せるようになったら押す。
- 2-3 分待つと Cold Start か Warm Start が押せるようになるのでいずれかを押す。
(Shutdown して、1-2 時間以内なら Warm start、それ以上なら Cold start)
そうすると、Setup>FEG Control の Extraction の値が徐々に上がっていく。
(Warm start は 25min くらいかかり、Cold start は 90min くらいかかる)
- ここで、ガンの Back up 電源を ON に戻す
- Autoloader>Autoloader の Option の Initialize を押す
- Autoloader>Temp Control の Option の State から、
Temp State Go to: Conditioning both を選んで↵を押す。
After Conditioning Go to: All Nitrogen Temp & 8/7/2018, 7:00AM など↵。
- Setup>High Tension のボタンを、押せるようになったら押す。
まずは 80kV まで上がる。
FEG Control の Operate が黄色になったら、段階的に 120, 160kV に上げる。
(Option の Emission がすぐ下がらないなど変なら、少し電圧を下げて待つ)
その後 Free high tension にチェックを入れて、10000V (=10kV) ずつ上げて、
190kV まで持っていく。さらにその後、3kV ずつ上げていく。

アラインメントについて

- Setup>Apertures の Option の Enable で、Obj, SA を押して黄色にする。
- Column Valves を開いて、光があることを確認

- Alignments>Alignments の Option の File から、200kV を選んで、Available にあるものを全て Selected に移動して、Apply を押す。
- Alignments>FEG Register の 200kV TEM を選んで、Set を押す。

Beam shift, Gun Tilt などの自動調整

- カセットに何か Grid を入れて、NanoCab で冷やして、電顕に入れる
- Grid を load して、Column Valve を open
- カーボン膜上にだいたい合わせる
- EPU の Preparation タブで、Data Acq にして Set
- 高さを 180nm にする
- AutoAdjust>AutoTuning で、全部にチェック入れて
- Start ボタンを押す
- (* AutoTuning の C2 Aperture 以降はあまり信用しない。後で manual でやる)
- 以上が終わったら、2. およそのアラインメントから始まる一連の Setup を行う。

19. Talos Arctica のレンズ/絞りの構成

Talos Arctica では、Lens, Apertures が、上から順に、以下のように配置されています。

Gun (+Gun lens)

C1 Lens

Aperture

C2 Lens

Aperture

Mini-condenser Lens (*nano probe/micro probe の切り換え)

Obj Lens (*stage)

Aperture

Dif Lens

Int. Lens

SA Aperture

P1,2 Lens